

## 話題提供

福田暁子（武蔵野市地域自立支援協議会・障害当事者部会長）

初めまして、皆さん、こんにちは。福田暁子と申します。聞こえますか。

移動中でしたので、受信ができなくて、どの程度私のことを紹介されたのかさっぱりわかりませんが、私は、武蔵野市の地域自立支援協議会の当事者部会の部会長をさせていただいています。部会長とは名ばかりで、みんなで支え合っただけで部会運営をしております。

私の障害は全盲ろうとって、全く見えなくて、全く聞こえません。コミュニケーション方法は、触手話という方法で、情報や皆さんの様子を通訳介助者を通して理解しています。昔は耳が聞こえていたので、声を出して自分で意見を言えるときもありますし、具合が悪いと難しいときもあります。呼吸器を使っています。車椅子に乗っています。

当事者部会は実にいろいろな障害を持った人が集まっています。とてもカオスです。でも、とても楽しいです。専門部会として、当事者部会からそれぞれほかの部会に当事者を派遣する形をとって、武蔵野市の自立支援協議会。

私自身の紹介は、きょうは当事者としてということですが、一応なんちゃってソーシャルワーカーでもあります。実際にどこかでソーシャルワーカーとして働いているかということ、そういうわけでもないのですけれども、アメリカの大学院でソーシャルワークを学んだ後に、現在は世界盲ろう者連盟の事務局長や、全国盲ろう者協会の中で活動したりしています。あとはバイトとかもしています。

きょうのテーマですが、「求む！こんな支援者」ということで、20分でどれだけ話せるのかなというのが正直不安です。とりあえず頑張りたいと思います。

周りにちょっと聞いてみたりしたので、その結果をお伝えするような形をとるのがいいかなと思います。どういう相談支援員やどういう相談する人がいいのかという質問をしてみたのですが、答えるのが難しい。逆に答えやすいのは、こんな支援員は嫌だ。どんな支援員は嫌だということ、がんがん返ってくるので、なるほど、そこからどうあればいいのかなというのを学ぶといいのではないかなと思いました。

大体内容ですけど、三つぐらいに絞りました。一つはそもそも相談支援自体が何だかわからない

ということ、二つ目が相談支援技術のことについてちょっと触れたい。三つ目が、相談支援員は相談を受ける人ですけども、相談もできる人でなければ困るということです。

1番目、相談支援員ってそもそも何だかわからないという声がありました。つまり、相談支援員は何者なのかわからない。相談、支援、どちらも人間と人間の仕事であります。よって、人間関係がものをいうのですけれども、まず人間って、ちょっと昔までは猿でした。群れとか、見えとか、上下関係とか、すごく気になる生き物です。本能的に、自分の空間に入ってきた人を、敵か味方かとか、受け入れてもいいかどうかというのをかぎ分けます。自分より偉そうな人というのは嫌いです。障害者に限らず、人というものはそういうふうな生き物だと。人間は無駄に虚勢を張ったり、見えを張ったりすることもあります。あと、何が自分にとって不利になるか。察知したらそういうことは言いません。なので、新しい猿山にお邪魔すると思ってください。

相談員も、新しい猿の山の群に入ったら自分も認めてもらわなければならないわけですから、そのためには工夫が必要になります。ちょっと専門的な言葉で言うと、信頼関係を築くとか、そういうことになるんだと思いますけども、ちょっと崩して言うと、認められるようになるための工夫は何かというと、まず、わかりにくく言わないでほしい。ほかに、最初からタメ口の人があります。あなた一体私の何なのさという感じですね。また逆に、「あつ、すばらしいですね。すばらしいですね。すごいですね。すごいね」。「はあ」というのも若干疲れます。

私としては、私をアセスメントしているより、障害当事者が相談支援員をアセスメントしていることに気をつけておいていただきたいと思います。個人個人によって相談支援員とのかかわり方、当事者からすると、どういう立場の人か。猿の群れですから、この人はどういう立場の人かというのがちょっと変わってくると思う。

ここで、否定的な言葉で相談支援員のことを言うときは残念だなと思います。例えば管理人だとか、番人とか、刑務官。何の刑を執行するのかわからないのですけど、あと裁判官。何の裁判をするのかさっぱりわかりませんが、そういうふうに関係を築いてしまうと、後々大変なことになります。

よくあることで、学校の担任の先生を自分で選べないのと同じで、契約という形式はとっていま

すが、相談支援員も基本的には選べないですよ。逆に自分が担当する障害者も選べないと思います。どういうことかという、当たり外れがあるので。宝くじ並みに。この当たり外れで、当たればパラダイスだけでも、外れたらもう人生がむちゃくちゃになる、ということを知っている、人生がむちゃくちゃになるリスクをとるかという、相談員は嫌だという人がいても、それは当然だとは思いますが。これは上手に説明する必要があるとは思いますが。

相談支援員としても大変だとは思いますが。困難事例とか、福田さんが回ってきちゃったよみたいな思いもあるかと思いますが、少しずつ、急がず焦らずやっていくのが必要かなと思います。

よくあることの二つ目としては、相談支援員を役所の回し者と思込んでいる人が結構いたりします。自分のポジションとして、当事者の周りの関係者も含めてわかるように説明してほしいなと思います。何ができて何ができないかというのを伝えてください。

役所アレルギーがある人は多いので、微妙なフレーズに反応します。例えば「前向きに検討します」とか、これは検討しないかと判断します。後ろ向きに検討するということは聞いたことないし、右向きも左向きもない。「前向きに検討します」と言われても、検討するのかわからないということですよ。「善処します」と言われても、何をやるのかわからない、これは何もやってくれないのだなというふうに察知してしまいます。役所アレルギーというか、気をつけたほうが良いようなフレーズはあります。

時間が余らないので、相談支援技術についてですけれども、一番大切なのは相手に合わせるということ。私の場合もですけども、本人と相談支援員の間には誰かが入る場合があります。そのときは気をつけてほしいと思います。通訳介助者、通訳が変わると、出す表現とか読み取りによって、同じことを話したのに違うことを話しているように聞こえるときもあります。そのときの気分によってはむらがありますので、調子がいいときはいいことを言うけど、調子が悪いときはまた違ったことを言うとか、一時だけの情報で判断してしまう危険性もあることは気に留めておいていただきたいです。

間に入る人が親ということもあります。その場合、「この子のことは何でも私は知っています。何でも聞いてください」と言われる。これは危ないなと私はいつも思います。

それから、わかりやすい書式、わかりやすい方法で提示してほしいのです。国書式のエクセルは全く点字でわからないですから。わかりやすく、点字でも読めるような方法で出してもらえると一緒に考えることができます。また、ルビが必要な人はルビが必要だし、逆にルビがあると邪魔な人もいます。ほか、聞く姿勢もいろいろあるということもすごく大切です。そして沈黙も大切です。せかす人は受けつけなくなっちゃう。受け入れられなくなっちゃうということがよくあります。

三つ目、相談支援員は、相談に乗る人だけでも相談する人でもあってほしいということです。その人らしい生き方は何かというのを常に頭に置いてほしいと思います。できないことをできるようにするというのが支援かという、ちょっとクエスチョン、クエスチョンという感じです。障害があると大変だとか、そういうのもわからなくてもないので、盲ろうという世界も結構楽しいというのを理解していただければと思います。

時間が5分ということですので、まとめに入りたいと思います。基本的に、人は自分のことは自分で決めたいものです。やれることは本人にやってもらおう。理想とする形とは若干の相違があるのは当然だと思いますけども、本人が計画相談支援になれば、何か起きたときにも、そこから学びというのが生まれてきます。リスクや責任というものもともに負うことができます。冒険になるかもしれないけど一緒にチャレンジする、その気持ちで相談支援を楽しんでもらえれば良いと思います。

最後、結果的には、課題を解決するというのは本人であって、支援者はそのきっかけづくりをする、それをサポートする人にすぎないということを中心にしておいてもらいたいなと思います。

例えば私みたいにコミュニケーションがちょっと難しい、障害がある。こう言いたいだろうなと、こう思っているのだろうなと、よかれと思って動いてしまったこと、聞かないで動いてしまったことというのは、大体の場合ありがた迷惑なことが多いです、非常に。こういう解決策ありますよ、この機械を使えば全てオーケーみたいなことを言われても、「要らないってばよ」というときもあります。

そして継続性のある支援、ここはすごく気に留めておいてほしいです。本人は交代する人はいないですよ。当たり前ですけど。でも、相談支援の人は、異動であったり、退職であったり、病気であったり、伴走者、一緒に走る人がかわっても

こっちが走り続けられるような体制というのが必要だと思います。

最後にまとめます。本当にまとめたいと思います。20分でまとめられないのですよ。当事者としては人生がかかっているのだから、やっつけ仕事で相談支援をやるのはやめてください。仕事量が半端ないのはわかっています。いついつまでに出してくれと役所が言うのも十分わかっています。

また、相談員としての自分の限界を知るというのも大切だと思います。過労死しないでほしいし、思い入れ過ぎるのもちょっと。自分の世話が見られない人はほかの世話も見られないというのは、私がソーシャルワーカーをばりばりやっていた時代にたたき込まれたことですね。

結局当事者として言えるのは、個人が納得できる相談支援になって何ぼということなのです。何だかんだ言いましたが、諦めないことが大切です。諦めたらそこで終わりです。諦めない。探していれば必ず道はあります。諦めたら終わりですので、どっちかが諦めなかったら何とかあります。

以上、私の話は終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

(拍手)

(高沢) はい。福田さん、どうもありがとうございました。

いつも福田さんはユーモアもあって、話していて楽しいのですが、福田さん、質問1個していいですか。さっき話があったように、福田さんはバークレーの第4世代で、時々僕も権利条約とかそういったことを質問するのですが、今日のテーマの一つにエンパワーメントというものがあって、先ほどのお話の中にも、できないことをできるようにさせることはクエスチョンだとおっしゃった。

いろいろな質問を彼女にして、いろいろユニークに答えを教えていただけるので、ちょっと酸素がなくなりつつあるかもしれないけど、そこだけちょっと教えていただけたらうれしいな。エンパワーメントについて、福田さんの答えを欲しい。

(福田) まだ酸素はあります。エンパワーメントについて、何かもう難しいことおっしゃいますな、私が気をつけているのは、出しゃばり過ぎないことです。信じることから始まります。例えば今当事者部会は、部会長が私でもう既にカオスな上に、さらに副部会長が知的障害者と発声が難しい脳性麻痺の車椅子の人、またそのほかにサポートはもちろんいますけれども、しゃべれる私でも、実践が難しい私とこの3人で連携をとるというこ

とで、誰かがやっちゃうのは簡単なんですけど、あえてやらない、出しゃばり過ぎないようにというのは非常に気をつけて、それは、それぞれ個人個人の持つポテンシャルを自分が開拓する過程を信じたいからです。

そうやって自分で見つけたものしか身につかないし、自分が経験したことしか結局は身につかないので、そこは、エンパワーメントという意味では気をつけています。

(高沢) ありがとうございます。当事者が主人公だということでしょうかね。

(福田) はい、そうですね。いかに裏方になれるかというか、裏方ぶれるかというか、伴走者になれるかというところがあります。

(高沢) どうもありがとうございました。皆さん、もう一度拍手をお願いいたします。